

治太宰

人間失格

日本語

近現代文学



УДК 811.521
ББК 81.2 Яп-93
Д14

Дадзай Осаму.

Д14 Исповедь «неполноценного» человека : книга для чтения на японском языке / Осаму Дадзай. — Санкт-Петербург : КАРО, 2025. — 192 с. — (近現代文学).

ISBN 978-5-9925-1640-1.

Осаму Дадзай — одна из самых трагичных и загадочных фигур японской литературы XX века. Роман «Исповедь „неполноценного“ человека» — последнее крупное произведение писателя — написан в жанре «ватакуси-сёсэцу» (повесть о себе). Дописав «Исповедь...» и вложив в нее всю свою душу, Дадзай вместе с Ямадзакки Томие совершил синдзю, «двойное самоубийство влюбленных».

В это время года созревают плоды вишни, поэтому 19 июня, день памяти писателя, в Японии отмечается как «День поминовения вишен».

УДК 811.521
ББК 81.2 Яп-93

ISBN 978-5-9925-1640-1

© КАРО, 2025
Все права защищены

人間失格¹

¹ Досл.: «Утрата звания „человек“». В русских изданиях принят единственный вариант перевода «Исповедь „неполноценного“ человека».

はしがき¹

私は、その男の写真を三葉、見たことがある。

一葉は、その男の、幼年時代、とでも言うべきであろうか、十歳前後かと推定される頃の写真であって、その子供が大勢の女のひとに取りかこまれ、（それは、その子供の姉たち、妹たち、それから、従姉妹いとかたちかと想像される）庭園の池のほとりに、荒い縞の袴《はかま》²をはいて立ち、首を三十度ほど左に傾け、醜く笑っている写真である。醜く？ けれども、鈍い人たち（つまり、美醜《びしゅう》などに関心を持

¹ Предисловие к повести ведется от лица стороннего человека, который рассматривает фотографии главного героя произведения Оба Ёдзо. Далее повествование ведется от лица главного героя.

² Некоторые сложные для прочтения и устаревшие слова даны знаками азбуки хирагана в кавычках.

たぬ人たち)は、面白くも何とも無《な》いよ
うな顔をして、

「可愛い坊ちゃんですね」

といい加減なお世辞を言っても、まんざら空
からお世辞に聞えないくらいの、謂《い》わば通
俗の「可愛らしさ」みたいな影もその子供の笑顔
に無いわけではないのだが、しかし、いささかで
も、美醜に就いての訓練を経て来たひとなら、ひ
とめ見てすぐ、

「なんて、いやな子供だ」

と頗すこぶる不快そうに呟つぶやき、毛虫で
も払いのける時のような手つきで、その写真をほ
うり投げるかも知れない。

まったく、その子供の笑顔は、よく見れば見
るほど、何とも知れず、イヤな薄気味悪《うすき
みわる》いものが感ぜられて来る。どだい、それ
は、笑顔でない。この子は、少しも笑ってはいな
いのだ。その証拠には、この子は、両方のこぶし
を固く握って立っている。人間は、こぶしを固く
握りながら笑えるものでは無いのである。猿だ。
猿の笑顔だ。ただ、顔に醜い皺しわを寄せている

だけなのである。「皺《しわ》くちや坊ちゃん」とでも言いたくなるくらいの、まことに奇妙な、そうして、どこかけがらわしく、へんにひとをムカムカさせる表情の写真であった。私はこれまで、こんな不思議な表情の子供を見た事が、いちども無かった。

第二葉の写真の顔は、これはまた、びっくりするくらいひどく変貌へんぼうしていた。学生の姿である。高等学校時代の写真か、大学時代の写真か、はっきりしないけれども、とにかく、おそろしく美貌の学生である。しかし、これもまた、不思議にも、生きている人間の感じはしなかった。学生服を着て、胸のポケットから白いハンケチを覗のぞかせ、籐椅子とういすに腰かけて足を組み、そうして、やはり、笑っている。こんどの笑顔は、皺くちやの猿の笑いでなく、かなり巧みな微笑になってはいるが、しかし、人間の笑いと、どこやら違う。血の重さ、とでも言おうか、生命いのちの渋さ、とでも言おうか、そのような充実感は少しも無く、それこそ、鳥のようではなく、羽毛のように軽く、ただ白紙一枚、そう

して、笑っている。つまり、一から十まで造り物の感じなのである。キザと言っても足りない。軽薄と言っても足りない。ニヤケと言っても足りない。おしゃれと言っても、もちろん足りない。しかも、よく見ていると、やはりこの美貌の学生にも、どこか怪談じみた気味悪いものが感ぜられて来るのである。私はこれまで、こんな不思議な美貌の青年を見た事が、いちども無かった。

もう一葉の写真は、最も奇怪なものである。まるでもう、としの頃がわからない。頭はいくぶん白髪のようなのである。それが、ひどく汚い部屋（部屋の壁が三箇所ほど崩れ落ちているのが、その写真にハッキリ写っている）の片隅で、小さい火鉢に両手をかざし、こんどは笑っていない。どんな表情も無い。謂わば、坐って火鉢に両手をかざしながら、自然に死んでいるような、まことにいまわしい、不吉なおいのする写真であった。奇怪なのは、それだけでない。その写真には、わりに顔が大きく写っていたので、私は、つくづくその顔の構造を調べる事が出来たのであるが、額は平凡、額の皺も平凡、眉も平凡、眼も平凡、鼻

も口も顎あごも、ああ、この顔には表情が無いばかりか、印象さえ無い。特徴が無いのだ。たとえば、私がこの写真を見て、眼をつぶる。既に私はこの顔を忘れていた。部屋の壁や、小さい火鉢は思い出す事が出来るけれども、その部屋の主人公の顔の印象は、ずっと霧消して、どうしても、何としても思い出せない。画にならない顔である。漫画にも何もならない顔である。眼をひらく。あ、こんな顔だったのか、思い出した、というよ様なよろこびさえ無い。極端な言い方をすれば、眼をひらいてその写真を再び見ても、思い出せない。そうして、ただもう不愉快、イライラして、つい眼をそむけたくなる。

所謂《いわゆる》「死相」というものにだって、もっと何か表情なり印象なりがあるものだろうに、人間のからだに駄馬の首でもくっつけたなら、こんな感じのものになるであろうか、とにかく、どこという事なく、見る者をして、ぞっとさせ、いやな気持ちにさせるのだ。私はこれまで、こんな不思議な男の顔を見た事が、やはり、いちども無かった。

第一の手記¹

恥の多い生涯を送って来ました。

自分には、人間の生活というものが、見当つかないのです。自分は東北の田舎に生れましたので、汽車をはじめて見たのは、よほど大きくなってからでした。自分は停車場《ていしゃじょう》

のブリッジを、上って、降りて、そうしてそれが線路をまたぎ越えるために造られたものだという事には全然気づかず、ただそれは停車場の構内を外国の遊戯場みたいに、複雑に楽しく、ハイカラにするためにのみ、設備せられてあるものだとばかり思っていました。しかも、かなり永い間そう思っていたのです。ブリッジの上ったり降りたりは、自分にはむしろ、ずいぶん垢抜あかぬけ

¹ Текст повести дан в тетрадах: «Первая тетрадь», «Вторая тетрадь», «Третья тетрадь».

のした遊戯で、それは鉄道のサービスの中でも、最も気のきいたサービスの一つだと思っていたのですが、のちにそれはただ旅客が線路をまたぎ越えるための頗る実利的な階段に過ぎないのを発見して、にわかに興が覚めました。

また、自分は子供の頃、絵本で地下鉄道というものを見て、これもやはり、実利的な必要から案出せられたものではなく、地上の車に乗るよりは、地下の車に乗ったほうが風がわりで面白い遊びだから、とばかり思っていました。

自分は子供の頃から病弱で、よく寝込みましたが、寝ながら、敷布、枕のカヴァ、掛蒲団のカヴァを、つくづく、つまらない装飾だと思い、それが案外に実用品だった事を、二十歳ちかくなってわかって、人間のつましさに暗然とし、悲しい思いをしました。

また、自分は、空腹という事を知りませんでした。いや、それは、自分が衣食住に困らない家に育ったという意味ではなく、そんな馬鹿な意味ではなく、自分には「空腹」という感覚はどんなものか、さっぱりわからなかったのです。へん

な言いかたですが、おなかが空いていても、自分でそれに気がつかないのです。小学校、中学校、自分が学校から帰って来ると、周囲の人たちが、それ、おなかが空いたろう、自分たちにも覚えがある、学校から帰って来た時の空腹は全くひどいからな、甘納豆はどう？ カステラも、パンもあるよ、などと言って騒ぎますので、自分は持ち前のおべっか精神を発揮して、おなかが空いた、と呟いて、甘納豆を十粒ばかり口にほうり込むのですが、空腹感とは、どんなものだか、ちっともわかっていやしなかったのです。

自分だって、それは勿論もちろん、大いにものを食べますが、しかし、空腹感から、ものを食べた記憶は、ほとんどありません。めずらしいと思われたものを食べます。豪華と思われたものを食べます。また、よそへ行って出されたものも、無理をしてまで、たいてい食べます。そうして、子供の頃の自分にとって、最も苦痛な時刻は、実に、自分の家の食事の時間でした。

自分の田舎の家では、十人くらいの家族全部、めいめいのお膳ぜんを二列に向い合せに並

べて、末っ子の自分は、もちろん一ばん下の座でしたが、その食事の部屋は薄暗く、昼ごはんの時など、十幾人の家族が、ただ黙々としてめしを食っている有様には、自分はいつも肌寒い思いをしました。それに田舎の昔気質かたぎの家でしたので、おかずも、たいていきまっけて、めずらしいもの、豪華なもの、そんなものは望むべくもなかったもので、いよいよ自分は食事の時刻を恐怖しました。自分はその薄暗い部屋の末席に、寒さががたがた震える思いで口にごはんを少量ずつ運び、押し込み、人間は、どうして一日に三度々々ごはんを食べるのだろう、実にみな厳粛な顔をして食べている、これも一種の儀式のようなもので、家族が日に三度々々¹、時刻をきめて薄暗い一部屋に集り、お膳を順序正しく並べ、食べたくなくても無言でごはんを嚙《か》みながら、うつむき、家中にうごめいている霊たちに祈るためのものかも知れない、とさえ考えた事があるくらいでした。

¹ Знак повтора слога, иероглифа. Здесь читается как *さんどさんど*, подчеркивается многократность действия.

めしを食べなければ死ぬ、という言葉は、自分の耳には、ただイヤなおどかしとしか聞えませんでした。その迷信は、（いまでも自分には、何だか迷信のように思われてならないのですが）しかし、いつも自分に不安と恐怖を与えました。人間は、めしを食べなければ死ぬから、そのために働いて、めしを食べなければならぬ¹、という言葉ほど自分にとって難解で晦渋《かいじゅう》で、そうして脅迫《きょうはく》めいた響きを感じさせる言葉は、無《な》かったのです。

つまり自分には、人間の営みというものが未いまだに何もわかっていない、という事になりそうです。自分の幸福の観念と、世のすべての人たちの幸福の観念とが、まるで食いちがっているような不安、自分はその不安のために夜々、転輾《てんてん》し、呻吟《しんぎん》し、発狂しかけた事さえあります。自分は、いったい幸福なのでしょう。自分は小さい時から、実にしばし

¹ Здесь ぬ как устаревшая форма отрицания *ない*, которая появилась после перехода на современную орфографию. Писатель подчеркивает старомодные, архаичные привычки родственников главного героя употреблением старых грамматических форм.

ば、仕合せ者だと人に言われて来ましたが、自分ではいつも地獄の思いで、かえって、自分を仕合せ者だと言ったひとたちのほうが、比較にも何もならぬくらいずっとずっと安楽なように自分には見えるのです。

自分には、禍わざわいのかたまりが十個あって、その中の一個でも、隣人が脊負せおったら、その一個だけでも十分に隣人の生命取りになるのではあるまいかと、思った事さえありました。

つまり、わからないのです。隣人の苦しみの性質、程度が、まるで見当つかないのです。プラクテカルな痛み、ただ、めしを食えたらそれで解決できる痛み、しかし、それこそ最も強い痛苦で、自分の例の十個の禍いなど、吹っ飛んでしまう程の、凄惨《せいさん》な阿鼻地獄なのかも知れない、それは、わからない、しかし、それにしても、よく自殺もせず、発狂もせず、政党を論じ、絶望せず、屈せず生活のたたかいを続けて行ける、苦しくないんじゃないか？ エゴイストになりきって、しかもそれを当然の事と確信し、いちども自分を疑った事が無いんじゃないか？ そ

れなら、楽だ、しかし、人間というものは、皆そんなもので、またそれで満点なのではないかしら、わからない、……夜はぐっすり眠り、朝は爽快《そうかい》なのかしら、どんな夢を見ているのだろう、道を歩きながら何を考えているのだろう、金？ まさか、それだけでも無いだろう、人間は、めしを食うために生きているのだ、という説は聞いた事があるような気がするけれども、金のために生きている、という言葉は、耳にした事が無い、いや、しかし、ことに依ると、……いや、それもわからない、……考えれば考えるほど、自分には、わからなくなり、自分ひとり全く変っているような、不安と恐怖に襲われるばかりなのです。自分は隣人と、ほとんど会話が出来ません。何を、どう言ったらいいのか、わからないのです。

そこで考え出したのは、道化でした。

それは、自分の、人間に対する最後の求愛でした。自分は、人間を極度に恐れているが、それでいて、人間を、どうしても思い切れなかったらしいのです。そうして自分は、この道化の

目次

人間失格	3
はしがき	4
第一の手記	9
第二の手記	32
第三の手記	98
一	98
二	145
あとがき	185